

Rube (ルーエ やすらぎ)

Februar 2019

41

The German House in Naruto

発行日 2019年2月28日
発行 鳴門市
編集 鳴門市ドイツ館
〒779-0225
鳴門市大麻町松字東山田55-2
TEL: 088-679-9110 FAX: 088-689-0909
E-mail: doitukan@city.naruto.i-tokushima.jp

ドイツ館初の試み・原資料の館外展示会 東京渋谷 Bunkamura 「板東俘虜収容所」の世界展の開催

平成31年1月12日から20日までの9日間、東京都渋谷区の東急 Bunkamura Box Gallery において、「板東俘虜収容所関係資料」のユネスコ「世界の記憶」登録推進をPRするための展示会を徳島県教育委員会と共催で開催しました。

展示は、「板東俘虜収容所」でのドイツ兵捕虜たちの演奏会や印刷活動といった文化的活動を原資料とパネルを使って紹介。また、板東の地から芽生えた地域の人々とドイツ兵たちの心温まる交流の記憶がドイツ館に保存展示されており、現在、これらの資料をユネスコ「世界の記憶」に登録申請しようと活動していることを中心に紹介しました。

期間中には東京都およびその近郊を中心に福島県や静岡県から約2,400名の来場者がありました。来場者からは、「今回のような都心部で展示する機会を増やしてほしい」や、「このような交流の史実を知ることができてうれしかった」との感想が伝えられるとともに、「世界の記憶」への登録推進活動について多くの応援メッセージをいただくことができました。3月には、京都文化博物館別館にて企画展を開催します。



2019年1月 東京渋谷 Bunkamura Box Gallery
「板東俘虜収容所」の世界展

ベートーヴェン「第九」交響曲を追って

全日本「第九を歌う会」連合会では「第九」アジア初演100周年事業として、2018年6月1日にベートーヴェンハウス・ボンの研究員、ベアテ・アンゲリカ・クラウス氏を招待し、ドイツ館で「第九」に関する考察を講演していただきました。クラウス氏からその要旨が寄稿されましたので掲載いたします。

数年前から、ベートーヴェン生誕の街ボンと、1918年にアジアで初めて「第九」交響曲が演奏された鳴門市の間には交流があります。2009年に、ベートーヴェンハウス・ボンでは特別展示会「音楽の力 1917年-1919年 板東(日本)におけるドイツ人捕虜収容所の文化的生活」を開催しまし



2018年6月1日
ベアテ・アンゲリカ・クラウス氏

た。同展示会については、ホームページ www.beethoven.de 内で日本語でもご覧いただけます。元鳴門市長で全日本「第九を歌う会」連合会名誉会長の亀井俊明氏は何度もボンを訪れて、2017年には合唱団とともに、ベートーヴェンハウス・ボン内の室内楽ホールにて第4楽章を披露されました。学術的分野においても交流が進んでいます：鳴門市ドイツ館の学芸員である長谷川純子氏は、ベートーヴェンハウス内の図書館で調査を行いました。「DAIKU2018」を迎えたことは、多くの日独間の協力のきっかけとなりました。

ベートーヴェンハウス・ボンの学術部では、ベートーヴェン作品の研究全集を編集しています。ミュンヘンのG.ヘンレ出版社から刊行されます。「第九」を含む巻は2019年の出版を予定しており、その編集者の私は2018年6月1日に鳴門市ドイツ館で、自身の研究内容（ベートーヴェン交響曲第9番作品125に関する考察）について講演するというご招待を喜んで引き受けました。講演では、文献を示し、ベートーヴェンの作業の仕方について解説し、どのような形で楽譜が伝承されたかについて回答しました。1823年/1824年



にベートーヴェンによって手書きされた貴重な作業譜がありますが、これは交響曲の完全版ではありません。1826年に出版された原版譜とその再版によって「第九」は広まりましたが、これらはベートーヴェンの協力を得ずにできあがったものです。

ベートーヴェンは1817年6月に、ロンドンのフィルハーモニック協会から2つの交響曲の作曲依頼を受けていましたが、1822年11月になってやっと彼はこの英国のオーケストラのために長大な交響曲を作曲すると受諾しました。その2年後、依頼人は並外れたスケールの大きな交響曲の楽譜を受け取り、それが合唱団とソリストを要する最終楽章とドイツ語の歌詞—シラーの“歓喜に寄せて”—が含まれていることにとっても驚きました。1825年3月のロンドンでの初演では、歌詞はイタリア語に翻訳されたものが歌われ、後に英語での公演も行われました。

「第九」はロンドンのために作曲されたにもかかわらず、初演は1824年5月7日にウィーンで行われました。さらに、ドイツでも1825年にアーヘンとフランクフルト・アム・マインで、1826年にはライプツィヒで、それぞれ公演が行われましたが、それらはすべて楽譜が出版される前のことでした。そのため、さまざまなプロの写譜家が書いた楽譜が膨大に存在し、そのうち多くの楽譜はベートーヴェンが見て、修正を加えています。これらの修正譜は、私達の楽譜の出版にとって重要な資料であり、そこに修正リスト、書簡、その他の資料が加わります。50以上の資料を研究し、資料としての価値を調査する必要がありました。これらを根拠として完成したベートーヴェン研究全集の「第九」を含む巻は、多くの点においてそれまでに知られていた楽譜とは異なるものです。調査結果を含む幅広い研究報告を補足し、なぜこのような新刊を編集するに至ったかについて説明しています。数年後、こちらでの初演200年を迎えるとき、「DAIKU2024」は日本においても今までとは違った演奏がされているかもしれません。

ベアテ・アンゲリカ・クラウス

第九アジア初演 100 周年記念 ユネスコ「世界の記憶」登録推進 講演会「板東に生きた祖父を想う」

「板東に生きた祖父を想う」と題し、第九アジア初演100周年記念・ユネスコ「世界の記憶」登録推進講演会がドイツ館で開催されました。秋も深まった10月27日、100名程の聴衆を前に、ペトラ・ボルナーさん＝スイス在住＝と、マイケル・コーバーさん＝東京都在住＝がお話くださいました。

講演会に先立ち、ペトラ・ボルナーさんから、祖父の資料150点寄贈の贈呈式がありました。ボルナーさんの祖父グスタフ・メラー氏は、ボルナーさんが生まれる前にすでに亡くなっていましたが、母から譲り受けた様々な画は、デザイ



2018年10月27日
講演をするペトラ・ボルナーさん

性の豊かなものばかりでした。「それにもまして、その才能を発揮することができたのは、収容所では心身の発達が許され、人間の精神が生き残ることができる理解と寛容に満ちた場所だったからではないか。現代、メ

ディアを通じ否定的なニュースが溢れるなか、建設的な板東のメッセージを広く知ってもらうことは、希望ある未来に繋がると思う。ベートーヴェンの「第九」の精神は、何度も再現することができる。」と語ってくださいました。

一方、マイケル・コーバーさんの祖父ヨハネス・バート氏は、捕虜時代に日本文化に興味を持ち、捕虜解放後、日本に残ることを決意し国際的なビジネスに携わりました。第2次世界大戦中、ソ連で一時捕虜となり、日本へ帰国するために日本海軍の潜水艦に乗船したり、戦後はGHQに一時強制送還されたりするなど「誰も想像できない実話」を生きたユーモア好きで優しい祖父について、コーバーさんは語りました。その実話からどのような不利な状況においても、その状況に自身の人生の課題を適応させる能力の大切さを学んだといいます。

本講演では、お二人から貴重なお話を伺うことができました。史上初の全世界を巻き込んだ第一次世界大戦が開戦した後、スイスにおいてヘルマン・ヘッセはベートーヴェンの「第九」の歌詞を用い、『おお友よ、この調べにあらず』という論説を新聞に発表しています。

戦場にいる人は、今は戦うより他にない。しかし、芸術家や文化人の使命は、時勢に流され戦争を煽り立てることなく、



2018年10月27日
講師のペトラ・ボルナーさん（中央左）マイケル・コーバーさん（中央右）

戦後、平和が成就しやすいように基盤を保つべきではないかと訴えたのです。

当時、ヘッセはドイツ大使館より、捕虜となったドイツ兵のために中立国スイスから物資を供給する仕事を行っていました。彼らの精神的な空白を埋めるため、主に教育・娯楽的配慮から図書を収集し発送していました。

このヘッセの記事は、当時、ドイツで戦争の熱に煽られていた人々等から非難されました。しかし、祖国ドイツから遠く離れた日本、板東において、ドイツ人捕虜たちの多くは、ヘッセの思想と重なるような行動をしていました。多くの板東の捕虜たちは、ヘッセの論説、思想に共感していたのかもしれない。板東で「第九交響曲」全楽章がアジアで初演されてから、100周年にベートーヴェンとヘッセ、そしてドイツ人捕虜たちの共通性を見出せたことは偶然ではありません。(長谷川)

「板東俘虜収容所跡」の国史跡指定について

2018年「板東俘虜収容所跡」が正式に国指定史跡となったことから、鳴門市教育委員会 生涯学習人権課に寄稿をお願いしました。

平成30年10月15日、「板東俘虜収容所跡」が正式に国指定史跡となりました。国内に残るドイツ兵捕虜収容所跡としては、板東が初めてとなります。当時の収容所の面積は約57,000㎡でしたが、今回の指定は、地権者の同意が得られた範囲約37,000㎡が対象となっています。

市ドイツ村公園とその周辺は、かつて収容所が開設された跡地（遺跡）となっています。市教育委員会では、これまでに収容所跡地の発掘調査や測量調査を実施し、日本側の管理棟やドイツ兵を収容した兵舎、倉庫、製パン所などの基礎遺構（レンガ積み）を確認しました。この調査成果とあわせ、市ドイツ館や東京のドイツ日本研究所等に所蔵されている当時の写真・図面をはじめ、捕虜たちの収容生活や文化的活動に関する資料を参考に研究を進めた結果、収容所に建設されていた各施設の外観や基本構造のほか、各施設がどのように使われていたかについてもわかってきました。昨年、話題となった「第九」アジア初演の地や、日独友好のきっかけとなった「ドイツ兵の慰霊碑」も史跡に含まれています。

このように、現地は、収容所に建設された各施設の基礎遺構が多く残り、ここでの様々な活動を裏付ける資料も豊富に残っていることから、第一次世界大戦に関する遺跡として国内において希少なものであるとともに、交戦国間における文化交流を象徴する遺跡として重要とされています。また、近代の軍事及び外国人との交流に関わる遺跡としても重要であると評価されています。

と、難しい説明はここまでにしますが、史跡の価値をより簡単に表せば、「歴史の舞台がそこに残っている」というこ

とになるでしょうか。この文章をお読み頂いている皆さんは、何よりもまず収容所跡に足を運んでみて下さい。そして様々な知識と感覚を駆使して、およそ100年前のドイツ兵捕虜達の様子を想像してみてください。私たちも、貴重な歴史文化遺産として大切に未来に引き継ぎ、より多くの方々が友愛の史実に思いを馳せて頂けるよう、整備活用に努めていきたいと考えています。

鳴門市教育委員会 生涯学習人権課

「第九」アジア初演 100周年で にぎわうドイチェス・フェスト

第25回ドイチェス・フェスト in なるとが10月28日、ドイツ館内外で開催され県内外からの来場者でにぎわいました。今回は「第九」アジア初演100周年にあたることから、ドイツ館前広場では、板東地区自治振興会が製作した、ゆるきゃら「フロイデ君」の紹介でイベントがスタートしました。広場ではドイツ兵捕虜たちも見た地元の獅子舞や懐かしいフォークライブが行われたほか、ドイツ兵捕虜たちが行っ



謄写版印刷の体験

ていた印刷方法の体験コーナーが設けられ、多くの家族連れが楽しみました。

館内のホールでは、地元のゆたか保育園とみやま保育園の園児が遊戯をしたり、「第九」喜びの歌を日本語とドイツ語で歌ったりすると、保護者たちが盛んにビデオやカメラにおさめていました。また、

ふだん着の「第九」コンサートでは、市内で活動する7合唱団と1音楽劇グループが得意の歌と劇を発表するとともに、全員で「今日の日はさようなら」と「第九」を合唱。本コンサートを最初から指導してこられた浅野司郎さんが「ドイチェスでは第九が他の歌と一緒にみんなで合唱する機会になり、多くのかたに親しんでいただけました」と感想を話すと大きな拍手が起きていました。

小会議室ではドイツ食品研究家の森本智子さんからドイツのお菓子などの特徴や歴史が楽しく試食も交えて話されました。引き続きドイツ館勤務のドイツ人国際交流員とドイツ語講座生がドイツ直送のバニラシュガーやヘーゼルナッツなどをふだんに使った手作りケーキと飲み物も振舞われ、参加者たちは大喜びしていました。

この日は大麻町の伝統的な工芸品や地場産品などを展示販売する「未来につなぐ大麻町ものづくりフェア」が隣接する道の駅「第九の里」前広場で同時開催されたことにより、さ



森本智子さんによる「ドイツのパンとお菓子の文化セミナー」

らに大勢の人たちでにぎわったようです。同広場では大谷焼の素焼きにベートーヴェンの胸像やドイツ兵捕虜作成再現ビールジョッキなどの絵付け体験なども好評で、早々と品切れになっていました。

「ドイチェス・フェスト in なると」は現ドイツ館が完成した際に館の周知を図るとともに、ドイツの姉妹都市交流や日独友好の輪を広げることを目的に 1994 年から実行委員会等が毎年開催してきましたが、今年度を最後に終了することになりました。

資料紹介

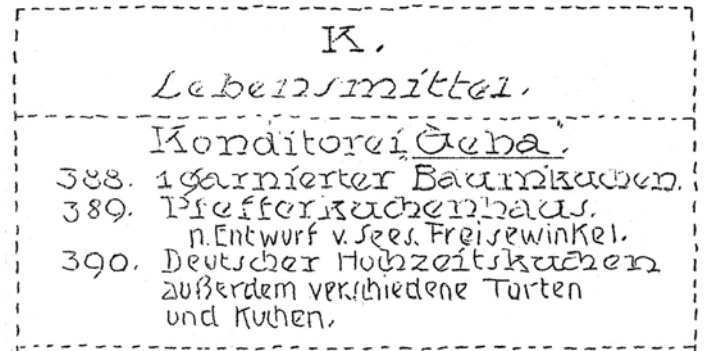
バウムクーヘン

バウムクーヘンは今や日本人にとって、すっかりおなじみのケーキになっていますが、もともとは神戸に本店があるユーハイムが製造販売してきたものです。この菓子メーカーの創業者はカール・ユーハイムといい、第一次世界大戦の際に捕虜となり、はじめ大阪その後広島島の似島に収容されていた人なのです。

このケーキが日本人に初めて紹介されたのは、1919（大正8）年3月に広島市の広島物産陳列館（現在の原爆ドーム）で開催された似島ドイツ兵捕虜の技術工芸品展覧会でのことであったとされます。その当時の目録によれば、樹木の幹のようなケーキが描かれていて、われわれの知る形のバウムクーヘンであることは確かです。そして、これを作ったのがカール・ユーハイムなのです。

ところで、板東では「俘虜製作品展覧会」がその前年の1918年3月に開催されていて、目録がドイツ語と日本語で出版されています。うかつであったのですが、これまでドイツ語の目録について丁寧に読まず、その展示物の具体的な内容についてはさほど注目していませんでした。最近その内容の一部を説明する機会があり、その際に収容所菓子店「ゲーバ」の展示品に「バウムクーヘン」の文字があるのを見てびっくりしたのです。ちょっと見づらいかも

ませんが、



388 1 garnierter Baumkuchen

（飾付けをしたバウムクーヘン1個）

と書かれていることがお分かりいただけると思います。

ここで問題なのは、われわれ日本人にとって「バウムクーヘン」というと樹木の年輪のように見える円形のものなのですが、実はドイツでは、生地を平たく積重ねながら焼くものもあるのです。目録には「飾付けをした」という形容が付けられていますので、おそらくは一般的なトルテのように上面に飾立てをおこなったものだったのでしょうか。

結論から言えば、「バウムクーヘン」が日本人の目の前に初めて現れたのは板東ですが、我々のイメージする「バウムクーヘン」を初めて紹介したのは、紛れもなくユーハイムであったということです。（川上）

鳴門市ドイツ館所蔵資料図録 「板東俘虜収容所関係資料 イベントプログラム編」

「第九」アジア初演 100 周年に合わせ、ドイツ館では、板東で開かれた演奏会や演劇などのプログラム 88 点をまとめた図録を刊行し販売しています。問合せはドイツ館（088-689-0099）まで。



今後の予定

2019年3月26日（火）～31日（日）10:00～19:30

京都文化博物館 別館ホール

ユネスコ「世界の記憶」登録推進特別展

「板東俘虜収容所」の世界展

3月30日（土）13:00～ 記念演奏会

京都文化博物館 別館ホール

所内演奏会「第7回室内楽の夕べ」再現コンサート

主催：徳島県教育委員会 鳴門市